

高等学校

平成 4 年 度

教育 研究 員 研究 報告 書

社 会

東京都教育委員会

平成4年度

教育研究員（高校社会）名簿

科 目	所 属	氏 名
日 本 史	園 芸 高 校 淵 江 高 校 小 平 西 高 校	赤 澤 泰 子 加 藤 健 仙 田 直 人
世 界 史	山 崎 高 校 北 園 高 校	岩 田 秀 彦 野 村 昌 幸
地 理	野 津 田 高 校 赤 坂 高 校 東 大 和 高 校	有 馬 利 一 渋谷 修 次 高 橋 聖 一
倫 理	羽 田 高 校 京 橋 高 校	田 久 仁 宮 澤 眞 二
政 治 ・ 経 済	墨 田 工 業 高 校 九 段 高 校 拜 島 高 校	榎 本 智 司 山 川 輝 雄 山 下 肇

担当

教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 天 井 勝 海

目 次

研究主題 変動する国際社会を理解させ、主体的に生きる力を育てる授業展開の工夫

主題設定の理由と研究の経過	2
I 環境の変容と私たちの生活の課題	3
1 地球環境保全の取り組み	3
2 熱帯林の減少と環境問題 —アマゾン川流域の開発を例として—	4
3 情報化・国際化に伴う地域社会の変容 —港区を例として—	6
4 高齢化社会とボランティア活動	8
II 歴史の中にもみる他民族との接触	10
1 江戸幕藩体制における蝦夷地との交流 —北海道への修学旅行を通して学ぶアイヌの人々の生活と文化—	10
2 欧米諸国の日本への接近 —フェートン号事件—	11
3 太平洋戦争期の東南アジアと日本	13
4 「アンネの日記」にみるユダヤ人への迫害 —学校行事と関係づけた授業の試み—	14
5 スペインとカタルーニャ	16
III 変動する世界における共存・協調の在り方	18
1 日米構造問題協議と国際経済における日本の役割	18
2 国境に生きる民族 —「クルド民族」を例として—	19
3 統一ドイツと外国人問題	21
4 先哲に学ぶ人間としての在り方生き方 —国際社会における日本人としての在り方生き方—	23

研究主題 変動する国際社会を理解させ、主体的に生きる力を育てる授業展開の工夫

主題設定の理由と研究の経過

今日、各国の政治・経済・文化などの活動が国境を越えて展開され、国際社会における相互依存が急速に深まっている。そのような国際情勢の中で、平和で豊かな社会を実現するためには、国際協力関係を一層緊密化することや、多様な価値観の理解などを通して他民族との共存を図ることが必要であると考えられる。このことを踏まえ、本部会では環境・民族・経済などに視点を当て、三つのグループに分かれ研究主題にせまることにした。

I 環境の変容と私たちの生活の課題

今日、私たちが直面している地球規模での環境問題や、国際化・情報化・高齢化に伴う様々な課題は、国際社会が相互依存関係を深めている状況の中で、世界的視野に立ってその対応を考察することがますます必要になっている。このことを踏まえ、このグループでは「地球環境保全の取り組み」、「熱帯林の減少と環境問題」、「情報化・国際化に伴う地域社会の変容」、「高齢化社会とボランティア活動」の四つの課題を通して、国際社会の変化に対する認識を深めさせ、主体的に生きる力を育てる授業展開の工夫を試みた。

II 歴史の中にみる他民族との接触

今日、歴史の学習を進める上で、歴史の中にみる民族相互の接触や交流を広い視野から理解することが、生徒の国際理解を深めるために重要である。そこでこのグループでは、「近世以降の日本の対外関係」、「アンネの日記」、「スペインとカタルーニャ」などの授業を通して多様な価値観の存在を認識させるとともに、伝統・宗教・生活様式などの民族固有の文化を理解させ、国際社会の一員として主体的に生きる力を育てる授業展開の工夫を試みた。

III 変動する世界における共存・協調の在り方

今日、世界の経済的・人的交流などはますます緊密化すると同時に、経済摩擦・民族紛争・外国人受入れ問題などが生じている。そこで、このグループでは、これらの課題に着目し、国際的な相互依存関係の深まりや、他民族の歴史や文化などを理解させるとともに、変動する世界における共存・協調の在り方について考察を深めさせ、主体的に生きる力を育てる授業展開の工夫を試みた。

I 環境の変容と私たちの生活の課題

1. 地球環境保全の取り組み

(1) 教材として取り上げた理由 東西冷戦が終結したといわれる今日、人類が解決すべき最大の課題の一つは地球環境問題である。国際社会における相互依存が深まっている状況の中で、地球環境を保全するためには世界各国の協力が必要である。また、個人の生活においても、先進国の大量消費型のライフスタイル(生活様式)を再検討するなどの英知と努力が求められている。こうした全人類的な課題である地球的規模の環境問題に対する理解を深めさせるとともに、社会の変化に対応した主体的な生き方を育てることをねらいとして、この教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 「地球サミット」の成果と課題を踏まえ、国際的な取り組みと問題点を理解させる。また「環境と開発に関するリオ宣言」に述べられているように「環境問題は、あらゆる関係者が、それぞれのレベルで参加することによって、最適な対処ができる」のであり、私たちのライフスタイルも「地球にやさしい」内容に転換していかなければならないことを考えさせる。前時は「様々な地球環境問題」である。新学習指導要領では「現代社会」の「(2) 環境と人間生活」の「ア 環境と生活」で扱う。あるいは、「政治・経済」の「(1) 現代の世界と日本」の「イ 国際社会の動向と日本」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・地球環境問題の国際化	○VTRを見て、地球環境保全のためにグローバルパートナーシップの確立が必要なことを再確認する。	○VTR「救え、かけがえない地球」
	・地球環境保全の国際的取り組みと課題	(1)年表で国際的な取り組みの歩みを確認する。 (2)地球サミットにおける国際的合意の内容を把握する。 ①「環境と開発に関するリオ宣言」	○資料「年表」 ○資料「リオ宣言」

展 開		<p>②「気候変動枠組み条約」など</p> <p>(3)「温室効果ガス抑制問題」に対する先進国間の対応策の相違を表で知り、各国の対応策と政治的・経済的背景との関係を考える。</p> <p>(4)「南北」の経済格差や「南」の諸国の交易条件、累積債務、資金逆流の実態を表から読み取る。</p> <p>①環境問題における「南北」の主張の相違点を把握する。</p> <p>②環境保全について「南」の諸国が「北」の諸国に期待することは何かを考え発表する。</p>	<p>○資料 「対応策一覧」</p> <p>○資料「途上国への債務純資金移転の推移」など</p>
	<p>・我が国の取り組みと課題</p> <p>・消費者の取り組みと課題</p>	<p>(5)地球環境保全に向けての、我が国の取り組みと国際協力（技術、資金など）の実態を把握する。</p> <p>(6)我が国のN G Oの活動と、諸外国のそれとの比較を通して問題点を把握する。</p> <p>(7)環境家計簿を作成し、自分たちの生活を点検する。</p> <p>①ゴミ ②買物 ③外食 ④缶飲料 ⑤自家用車</p> <p>(8)グリーンコンシューマー運動やリサイクル運動などの環境保全活動の実態を理解し、その役割を考える。</p>	<p>○資料「外務省資料」など</p> <p>○資料（N G Oの比較）</p> <p>○環境家計簿 配付、記入</p>
まとめ	<p>・暮らしのなかでの工夫</p>	<p>○環境に役立つ暮らしの知恵を提案する。</p>	

- (4) 評価の観点 ①地球環境保全における各国の協力の必要性和問題点を理解できたか。
 ②地球環境保全のためには自分たちの生活を見直す必要があることを理解できたか。③環境保全に役立つ暮らし方を常に考える姿勢ができたか。
- (5) 指導上の留意点 V T Rや作業プリントを用いて生徒の関心を高めるよう工夫する。

2. 熱帯林の減少と環境問題 —アマゾン川流域の開発を例として—

- (1) 教材として取り上げた理由 環境問題が叫ばれるようになってから久しいが、当初、

その環境問題の多くは先進工業国の経済発展と共に増大していった。森林資源においても、先進工業国の資源確保のための無秩序な開発が問題とされてきた。特に、東南アジアの熱帯林開発については、日本とのかかわりの大きいことが指摘されてきた。しかし、近年になって、先進工業国だけではなく、開発途上国が自国の開発のために、森林資源の開発を行うようになってきた。そこで、本時では南アメリカのセルバ（アマゾン川流域）の森林資源（熱帯林）を事例として、森林資源の開発の変化と現状を理解させ、将来の課題を国際的視点から考察させ、主体的に考える力を育てることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 今日熱帯林の減少が、先進工業国の資源としての森林伐採だけでなく、ブラジル政府の国策としてのアマゾン川流域開発や、失業者の増大に対する救済策として行われている失業者の森林地帯への入植による急速な森林焼失などによって、起こされている実態を把握させる。さらに、森林資源の減少が、私たちの生活にどのような影響を及ぼすかを考えさせる。なお、本時は「地理」の主題学習「環境問題としての熱帯林の減少」（4時間構成）の第3時限として取り扱う。第1時限で「世界の森林資源」、第2時限で「熱帯林の開発」を、また、第4時限で「熱帯林の減少に伴う問題と今後の課題」を扱う。また、新学習指導要領では、「地理B」の「(2) 人間と環境」の「オ 世界の環境問題」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・熱帯林の現状	○VTRを見てアマゾン川流域の熱帯林の現状を確認する。	○VTR「アマゾン紀行」
展 開	・先進工業国による開発 ・開発途上国による開発 ・アマゾン川流域の開発	(1)VTRにより、先進工業国の資源としての熱帯林伐採の現状を知る。 ・純林の伐採方法との違いを理解する。 (2)熱帯林を有する開発途上国において、自国開発のために森林開発を積極的に行っていることを理解する。 (3)道路建設、鉱産資源の開発、農地の拡大、失業者入植などによる森林開発の具体例を理解する。 (4)無秩序な開発が、地球規模での環境問題に発展する背景を考える。	○VTR「残酷な森」 (マレーシア) ○南米の地図 ○VTR「アマゾン紀行」

	<ul style="list-style-type: none"> 日本の役割 	<p>(5)地球規模の環境問題で、現在日本に求められていることや、この問題の解決に向けての国際的な協力の在り方を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> V T R 資料
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 私たちの生活と森林資源 	<ul style="list-style-type: none"> 私たちの生活の中で、森林資源の有効的な利用の方法について考える。 古紙回収（再生紙） 竹割箸 など <p>上記の内容について、プリントにまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> プリント配付

(4) 評価の観点 ①熱帯林の現状を理解できたか。②開発途上国自身による熱帯林の開発の現状を理解できたか。③無秩序な開発が大きな環境問題に発展することが理解できたか。④森林資源の破壊防止のための日本の役割や私たちの生活の在り方について考えることができたか。

(5) 指導上の留意点 ①V T R教材を視聴する前にあらかじめ視聴の視点を指摘する。②森林資源の有効利用を、身近な製品を通して考えさせる。

3. 情報化・国際化に伴う地域社会の変容 ー港区を例としてー

(1) 教材として取り上げた理由 近年の国際社会は既存の枠組みや国境を越えた活動が活発化し、それによって私たちの生活環境も大きく変わろうとしている。都市の変容もその一つのあらわれといえる。東京は、日本の首都としての機能だけでなく、世界の産業・情報活動などの中心地の一つとしての機能が加わり、国際都市として発展している。また、その一方で人口集中や都市公害、地価の高騰など、新たな課題を有するようになった。そこで、昭和50年代後半以降、都心3区の中でも事務所・店舗等が急激に増加した港区を例として、情報化・国際化に伴い身近な地域がどのように変容したかを考察し、それを通して社会の変化に対応した主体的な生き方を育てることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時までには開発途上国・先進資本主義国の都市問題をそれぞれ学習し、過度の人口や諸機能の集中が生活環境の悪化と深いかわりがあること、市街地の内部では建造物の老朽化などのため再開発が進められていることなどをとらえさせておく。本時は都市問題の第3時限として行うが、情報化・国際化に伴う港区の土地利用の変化が生活環境にどのような影響を与えているかを理解させ、今後どのような方向に変化しようとしているかを考察さ

せる。新学習指導要領では「地理A」の「(3) 現代世界の課題と国際協力」の「ア 地球的課題の出現とその要因」、 「地理B」の「(3) 生活と産業」の「エ 産業、人口の都市集中と都市問題」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・港区の現状	○VTRを見てここ数年で人々の生活や町の様子が大きく変わったことを知る。また地価が異常に高騰した様子を理解する。	○編集VTR (NHK「ニュース21」)
展 開	・人口動態の 変化 ・土地、建物 利用、地価の 変化 ・産業構造の 変化	(1)配付資料をグラフ化し、次のことを読み取る。 ①人口減少が顕著になった時期 ②人口の社会的増減と人口減少との関連 ③高齢化の進行 ④夜間人口の減少と昼間人口の増加 ⑤外国人登録者が急増した時期 (2)配付資料を着色し、人口減少の地域的特色を読み取る。 (3)配付資料から、次のことを読み取る。 ①事務所店舗等床面積が増加した時期 ②外国企業の進出が顕著になった時期 ③外国企業分布の地域的特色 ④人口減少地域と外国企業分布との関連 ⑤地価・賃貸価格が高騰しはじめた時期 (4)配付資料から、次のことを読み取る。 ①全産業のうち卸・小売業とサービス業の占める割合 ②製造業のうち出版・印刷業の占める割合	○資料と作業 プリント配付 「人口統計」 などの資料 ○資料配付 「白地図」 ○資料配付 「事務所店舗 等床面積の 変化」など の統計表 ○資料配付 「産業構造に 関する統計」
ま と め	・地域社会の 変化	○情報化・国際化に伴う土地利用の変化が生活環境に影響を与えていることを知る。	○スライド、 資料配付

	○ スライドや資料により東京湾岸の再開発の計画を理解し、国際都市東京の将来像を考察する。	「ウォーターフロント」
--	--	-------------

(4) 評価の観点 情報化・国際化という大きな変動が地域社会や日常生活に与えている影響を理解できたか。

(5) 指導上の留意点 VTRや各種統計資料・スライドを利用することにより、指導内容を具体的に取り扱うようにする。

4. 高齢化社会とボランティア活動

(1) 教材として取り上げた理由 わが国の人口に占める老年人口の割合が急速に増加し、高齢化社会となり、その対応が急務となってきた。これまで、高齢化対策はスウェーデン、イギリスなどが模範とされてきたが、これらの国においても現在多くの課題を抱えるようになってきており、その改善が迫られている。こうした中で、わが国の高齢化社会への対応が欧米先進諸国やアジア諸国からも注目され始めている。そこで生徒に、高齢化社会の特色を理解させ、それを通し、人間としての在り方生き方を考えさせることが重要であると考え、この教材を設定した。

(2) 本時のねらい 特に都市においては、核家族化が進行するとともに、生徒が高齢者に接する機会は少なくなってきた。そのことともかかわって、高齢者に対する「無理解」「無関心」などの問題が生じてきていることが指摘されている。そこで本時では、諸外国の高齢化の現状にも触れながら、高齢化社会の中で高校生として今、「何ができるのか」「何をしたら良いのか」を考えさせる。なお、本時は4時間構成の第1時限に当たり、第2時限以降は「世界の国々の高齢化対策」、「日本の高齢化対策」、「高齢化社会での在り方生き方」を取り上げる。新学習指導要領では、「現代社会」の「(1) 現代社会における人間と文化」の「ウ 現代社会の特質と青年期の課題」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・高齢者への対応	○ 高齢者に対するこれまでの対応について、資料を参考にしながら発表する。	○ 資料「新聞」

展 開	<ul style="list-style-type: none"> 世界の国々と日本の高齢化の実態 	(1)地域別、国別の老年人口の推移を読み取る。 ①世界の国々の高齢化の実態 ②日本の高齢化の実態 ③日本と諸外国の高齢化の比較	<ul style="list-style-type: none"> 資料「世界の老年人口の割合」
	<ul style="list-style-type: none"> 高齢化社会の抱える課題 	(2)高齢化社会の抱える課題を理解する。 ①高齢者自身の課題 ②高齢者とその家族の課題 ③制度上の課題（社会保障・社会福祉など）	<ul style="list-style-type: none"> 資料「老人ホームの実態」 VTR「二人で生きたかった」など
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> 高校生と高齢者 	(3)本校の「ボランティア活動」について知る。 ①「VTR」（本校のボランティア活動） ②「生徒の感想文」「実施後のアンケート」	<ul style="list-style-type: none"> VTR資料「感想文」「アンケート」
	<ul style="list-style-type: none"> 高校生の在り方生き方 	<ul style="list-style-type: none"> 高齢化社会における私たちの役割を考え、発表する。 今、何ができるのか。 高齢者にどのように接していくのか。 	<ul style="list-style-type: none"> 用紙配付

(4) 評価の観点 ①世界と日本の高齢化の実態について理解できたか。②人口の高齢化によって生じる問題点を理解できたか。③高齢化社会の中で、高校生として「何ができるのか」といったことについて、主体的な考えを持つことができたか。

(5) 指導上の留意点 ①資料を基に、生徒が主体的に考えられるよう配慮する。②生徒が自ら考えたことを実行できるように指導する。

Ⅱ 歴史の中に見る他民族との接触

1. 江戸幕藩体制における蝦夷地との交流

ー北海道への修学旅行を通して学ぶアイヌの人々の生活と文化ー

(1) 教材として取り上げた理由 最近、飛行機利用による北海道への修学旅行が増加しているが、この地域に関する本校生徒の認識は必ずしも十分ではない。本校の「歴史の学習に関する調査」では、例えば、江戸幕府の鎖国下の外交をとってみても、対馬・松前・薩摩藩を窓口とした朝鮮・蝦夷地・琉球との交流に対する生徒の認識は十分でなかった。そこで本研究では、本校における北海道への修学旅行の学習効果を一層高めるため、「幕藩体制下の蝦夷地におけるアイヌの人々との交流」の指導計画の作成を試みた。また、この学習を通してヨーロッパ中心の外交だけでなく、東アジアに視点を置き、幕藩体制下の外交を把握し、我々の身近に存在する民族の歴史を理解させることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい ①和人の側から見て描いた「蝦夷国風図絵」などによって、松前藩と蝦夷地の交流の実態を理解させる。そして修学旅行を通してアイヌ文化の特色や価値を体験的に学習するとともに、近隣に生活する民族を理解し、尊重する態度を養うことによって、東アジアからみた幕藩体制の外交という新たな視点に気付かせる。②本時は、「鎖国以後の外交と貿易」の中で扱うものとし、「長崎貿易」、「朝鮮通信使」、「蝦夷地との交流」、「琉球との外交」の4時間構成の第3時限に当たる。新学習指導要領では、「日本史B」の「(4) 幕藩体制の推移と文化の動向」の「イ 幕藩体制の形成と鎖国」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・北海道への修学旅行とその訪問地	<ul style="list-style-type: none"> ○ 修学旅行の見学地やアイヌの人々の生活や文化に関する予備調査の結果をまとめたプリントを見る。 ○ 修学旅行のコースや見学地、地名などを把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ プリント配付 ○ 地図参照
	・アイヌの人々の生活と文化	(1)アイヌ文化の特色を理解する。 ①言語 ②口誦伝承 ③文化の起源	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ユーカラ」

展 開	・松前藩成立 以前の蝦夷地	④社会生活 ⑤衣食住 ⑥信仰 ⑦家族構成など (2)和人の進出の状況を把握する。 ①安東氏の進出とコシャマインの反乱 ②蠣崎・松前氏による交易独占と秀吉・家康の認可	○年表の作業 プリント配付	
	・松前藩成立 とアイヌの人 々との交易	(3)松前藩との交易の形態を理解する。 (4)商人の流入による交易の形態の変化をまとめる。 ①狩猟・漁場の破壊とシャクシャインの反乱 ②場所請負制の成立による労働の実態	○「松前江差 屏風」 ○「近世蝦夷 人物誌」	
	・蝦夷地内国 観の形成	(5)「蝦夷国風図絵」などから和人のアイヌの人々の見 方を考察する。	○「蝦夷国風 図絵」など	
	・幕府による 直轄	(6)ロシアの南下による幕府の蝦夷地直轄の背景を理解 する。	○八王子千人 同心の入植	
	ま と め	・修学旅行訪 問地での見学 などの視点	○「蝦夷の風俗画展」見学の視点を考える。 ○「民族博物館」などで、「アイヌの人々の生活や文 化」を見学する際の視点をまとめる。	○修学旅行用 ワークシート

(4) 評価の観点 ①北海道への修学旅行を実施するに当たり、正しいアイヌの人々の歴史と文化を認識することができたか。②また「蝦夷国風図絵」などを通して江戸時代における和人のアイヌ観を把握し、アイヌの人々の立場から蝦夷地をみることができたか。

(5) 指導上の留意点 ①写真・プリント・図版・地図・資料を効果的に利用し、様々な視点から考察できるようにする。②アイヌの人々の生活や文化を認識し、それらを尊重する態度を養う。

2. 欧米諸国の日本への接近 —フェートン号事件—

(1) 教材として取り上げた理由 18世紀後半から19世紀前半、欧米諸国は産業革命や市民革命などを通して、近代化を進めるとともにアジア各地に進出するようになった。従来、欧米諸国の日本への接近の学習については年代順に扱うことが多かったが、本研究では1808（文化5）年のフェートン号事件を通して、日本を取り巻く国際環境の動向に触れ、欧米の変動する国際関係が日本に及ぼした影響や江戸幕府の対応について考察させることを試みた。

(2) 本時のねらい ①「フェートン号事件」の学習を通して、世界が急速に変化し、緊密に結び付こうとしている当時の国際情勢をとらえ、日本が置かれていた立場を理解させる。②本時は「日本史」の授業で「田沼の政治」、「寛政の改革」に引き続く2時間構成の第1時限で扱う。前時までに幕府の各政権担当者の対外政策に触れておく。次時に、その他の国々の日本への接近、異国船打払令、蛮社の獄などを扱う。新学習指導要領では「日本史A」の「(3) 日本の近代化への道と19世紀の世界」の「ア 国際環境の変化と幕藩体制の動揺」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	<ul style="list-style-type: none"> 海外情報と幕府 事件の概要 	<ul style="list-style-type: none"> 鎖国下における海外情報収集の方法を確認する。 オランダ風説書でフランス革命の内容を知る。 フェートン号の絵画を見て、事件の概要を把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料配付 「寛政六年風説書」
展 開	<ul style="list-style-type: none"> 事件の原因 長崎における貿易の動向 事件の対応 長崎出島接收計画 	<ul style="list-style-type: none"> (1)なぜイギリス船が長崎に来航したのかを考える。 (2)18世紀後半から19世紀前半のヨーロッパの変動を復習する。 <ul style="list-style-type: none"> ①イギリスの産業革命による海外市場の拡大 ②フランス革命後のフランスのオランダ占領 ③イギリスとフランス・オランダの対立 (3)ヨーロッパの変動が、長崎における貿易に与えた影響を理解する。 (4)この事件に対する幕府の対応を把握する。 (5)幕藩体制の動揺とその背景を理解する。 (6)幕府の対応について、意見や感想を出し合う。 (7)イギリス人ラッフルズが長崎出島を接收する計画を持っていたことの背景などを考える。 (8)長崎出島接收計画について、意見や感想を出し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 年表、地図などの活用 「ゾーフ日本回想録」 「長崎奉行の謝罪書」 深入りをしない。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> 変動する国際社会 	<ul style="list-style-type: none"> その他の国々の日本への接近の様子をまとめる。 変動する国際関係が日本に及ぼした影響を再確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 次時につなげる。

- (4) 評価の観点 ①フェートン号事件の原因と当時の変動する国際社会との関係が理解できたか。②幕府の事件への対応について、資料などをもとに主体的に考えることができたか。
- (5) 指導上の留意点 ①年表や地図を活用して、欧米諸国の変動やアジアの様子を理解させる。②鎖国下においても、いろいろな形で海外の情報が入ってきたことを理解させる。
- (6) 参考文献 斎藤阿具訳『ツーフ日本回想録・フィッセル参府紀行』雄松堂 1966
(昭和41)年復刻 田保橋潔『増訂 近代日本外国関係史』刀江書院 1943(昭和18)年

3. 太平洋戦争期の東南アジアと日本

- (1) 教材として取り上げた理由 国際化の進展の中で、東南アジア地域と日本との交流が一層緊密化するとともに、過去の歴史を踏まえた国際協調の在り方が問われている。そこで、「太平洋戦争期の東南アジアと日本」を学ぶことを通して、近隣諸国に対する理解を深めるとともに、今後の国際協調の在り方について主体的に考える力を育てるために本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 太平洋戦争の大きな戦場の一つが東南アジア地域であったことを確認させ、日本の占領統治の実態や各国の独立運動について理解させるとともに、東南アジア諸国民から見た現代の日本について考えさせる。なお、本時は2時間構成とし、新学習指導要領「日本史B」の「(6) 両世界大戦と日本」の「ウ 第二次世界大戦と日本」で扱う。
- (3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・アジアの教科書にみる太平洋戦争	○シンガポールやインドネシアの教科書では日本の占領がどのように書かれているのかを発表し、感想を述べる。	○東南アジアの教科書の抜粋(配付済)
展	・開戦と東南アジアの占領 ・「大東亜共栄圏」構想	(1)日本の東南アジアへの進出状況を知る。 ・どこの国の軍隊と戦っていたのかを確認する。 (2)「大東亜共栄圏」構想が日独伊三国同盟締結の直前に出されたことに気付き、国民の間に日本を盟主としたアジアの建設というイメージが広がったことを理解する。	○VTR「太平洋戦争」 ○「大東亜共栄圏」・詩・短歌などの資料

開	・ 東南アジア に対する統治 方針と軍政の 実態	(3)東南アジアの占領地統治方針とそれが出された時期 や経緯を把握し、軍政との関係を理解する。 (4)東南アジア諸国に対する様々な占領統治のタイプを 把握する。 ①日本の軍政が敷かれた国々 ②フランスとの共同統治が行われた仏領インドシナ ③独立国タイと日本 (5)日本の軍政が現地の人々の生活にどのような影響を 与えたのかを理解する。	○「南方占領 地行政実施要 領」など ○ 占領に關す る資料 ○ 日本語教科 書など
	・ 東南アジア 各国の民族独 立運動	(6)「大東亜会議」に参加した各国の指導者に民族独立 への期待があったことを知る。 (7)各国での抵抗組織の成立と戦後の独立運動との関係 を理解し、意見を出し合う。	○ V T R「遺 された声」 ○ 民族運動に 關する資料
ま と め	・ 今後の国際 協調の在り方	○ 太平洋戦争期の日本の東南アジア支配について感想 を書き、今後、東南アジアの諸国民とどのようにして 相互理解を深めていくかを考える。	○ 原稿用紙配 付

(4) 評価の観点 ①太平洋戦争期の日本の東南アジア支配や東南アジア諸国の独立運動について、理解を深めることができたか。②当時の日本の占領政策が現代においても、各国国民の日本観に大きな影響を与えていることが理解できたか。③今後の東南アジア各国との国際協調や、交流の在り方について、主体的な考えをもつことができたか。

(5) 指導上の留意点 ①V T Rを視聴する前に注意点を指摘する。②年表・地図・資料などを効果的に活用し、具体的なイメージを持たせる。

4. 「アンネの日記」にみるユダヤ人への迫害 —学校行事と関係つけた授業の試み—

(1) 教材として取り上げた理由 国際化の進展にともなって民族問題が大きな課題になっているが、我々日本人もこの問題を考えていくことは重要なことである。そこで本校の学校行事である芸術鑑賞教室での「アンネの日記」の鑑賞を授業に取り入れ、ユダヤ人に関する問題

を教材として取り上げた。「アンネの日記」を通して、ユダヤ人が迫害を受けた理由や、その後ユダヤ人がパレスチナに入植することにより生じた民族問題を歴史的に理解させる。さらに、その解決の道を探ることにより、変動する国際社会の中で、今後、他の民族との接触や交流の在り方を主体的に考える力を育てることを目的とし、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 「アンネの日記」の感想文を導入としてユダヤ人迫害の実態を考察させ、さらに、アンネの年譜と歴史年表からなる対比年表などの資料をもとにグループごとに討論させ、ユダヤ人迫害の背景の考察を深めさせる。なお本教材は、従来世界史の各時代で取り上げて扱うことの多かったユダヤ人に関する問題をまとめて重点的に指導する。本時は、「古代ユダヤ教の成立と離散」、「中世ヨーロッパのユダヤ人とキリスト教徒」、「ポグロム、シオニズムから第一次世界大戦中の民族運動」、「ナチスとユダヤ人迫害」、「パレスチナ問題」の5時間構成の第4時限に当たり、新学習指導要領の「世界史B」の「主題学習」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・ナチスドイツによるユダヤ人迫害	○強制収容所におけるユダヤ人迫害の実態を知る。 ○芸術鑑賞教室「アンネの日記」の感想文を読み、それをもとに迫害を受けた理由を考える。	○VTR「夜と霧」 ○資料配付
展 開	・迫害の歴史的経緯とその理由、新たな民族問題	(1)4 グループに分け、次の点について討論する。 ①世界恐慌とナチスの台頭 アンネ誕生の頃のドイツ経済を理解する。 ②ドイツにおけるユダヤ人排斥の背景 アンネの移住、隠れ家での生活と、その頃のヒトラーの政策の実態を理解する。 ③ユダヤ人の生活 アンネの移住、隠れ家での生活と、その頃のユダヤ人の経済活動の実態と宗教の特色を理解する。 ④パレスチナ問題の発生 「日記」にみるユダヤ人の将来の展望と、パレスチナにおけるイスラエル建国の実態を理解する。	○対比年表などの資料配付

		(2)各グループの代表者が討論の要点を発表する。	
ま と め	・民族問題の 解決の道 ・レポートの 作成	○民族問題の複雑な背景を理解し、真の国際理解とは何かを考える。 ○世界と日本とのかかわりに関心を持ち、国際社会の中で主体的に生きることの大切さを理解する。	○資料配付 「世界の民族 問題プリント」

- (4) 評価の観点 ①ユダヤ人迫害の実態やその背景を歴史的事実に基づき理解できたか。②民族問題解決の必要性を理解できたか。③民族問題の教訓を日本人にも直接かかわるものとして理解できたか。それを今後の国際化に伴う他国との交流の中で生かそうとする姿勢ができたか。
- (5) 指導上の留意点 ①VTR, 生徒の書いた感想文を利用し、教材への関心を高めるよう工夫する。②設問の仕方や資料の作成を工夫し、生徒自身に課題を考えさせるようにする。

5. スペインとカタルーニャ

- (1) 教材として取り上げた理由 バルセロナオリンピックでスペインのカタルーニャの存在が一躍知られるようになった。従来スペインは、社会科の授業で取り扱う機会が少ない国である。生徒の間でもオリンピック以来、この国に対する関心が高まっているが、「情熱」「フラメンコ」「闘牛」など、観光案内で紹介されるイメージの影響を強く受けているように思われる。一面的な見方や限定された情報だけで全体を把握すると誤った認識を持ってしまうこともある。真の国際理解を進めるためには、広い視野に立って世界の国々や諸地域を考察することが必要である。このことを踏まえ、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 世界の地域の特色については、総合的に把握することやその方法について考察させることが必要である。ここでは、カタルーニャを一例としてスペインのもつ多様性を理解させ、この国を広い視野から総合的にとらえることの重要性を認識させる。本時は、「南ヨーロッパの国々」の中で取り扱い、「イタリアの南北格差」、「スペインとカタルーニャ」、「ポルトガル」の3時間構成の第2時限に当たる。新学習指導要領では、「地理A」の「(2) 世界の人々の生活・文化と交流」の「イ 諸民族の生活・文化と地域性」あるいは、「地理B」の「(4) 世界と日本」の「ア 世界の地域区分と地域」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・バルセロナの位置	○オリンピック直前にカタルーニャ自治州政府が出した新聞広告をみながら地図帳と比較対照して、バルセロナの位置を確認し、カタルーニャ自治州の存在を知る。	○地図帳と1992年7月17日付の新聞広告を利用
展 開	・カタルーニャ自治州 ・連合国家スペイン ・スペイン人の多様性 ・カタルーニャ語	(1)カタルーニャ自治州が独自の政府・国歌・国旗を保有していることを知り、日本の都道府県との相違点を認識する。 (2)国土回復運動期におけるキリスト教諸国家の興亡がスペインの地方分権制の基礎になっていることを理解する。 (3)スペイン人は、歴史的にみて起源も発祥地も違う人々によって構成され、多様な生活様式がみられることを理解する。 (4)スペインには、スペイン語以外にも複数の独自の言語が存在し、カタルーニャ語も憲法で保障されていることを確認する。	○行政区分と国旗を資料で紹介 ○歴史地図を利用 ○住民分布図を利用 ○スペイン憲法第3条を資料で紹介
ま と め	・国際理解の在り方	○スペインの多様性を整理し、多面的なものの見方や考え方の必要性を知る。 ○本時の内容を参考にしてスペインの多様な生活や文化に関するレポートを作成し、次回の授業で発表する。	○本時に関連する参考文献をプリントで紹介

(4) 評価の観点 ①民族の生活と文化が様々な歴史的変遷と他民族との接触や交流を経て培われていることを理解できたか。②文化の多様性・複合性や相互交流を広い視野から考察することや文化の相対化ができるようになったか。

(5) 指導上の留意点 ①生徒の興味・関心などに留意し、具体的かつ身近な資料を精選して利用する。②「世界史A」及び「世界史B」の内容との関連に十分配慮する必要があるが、歴史的内容については、あまり深入りしないようにする。

Ⅲ 変動する世界における共存・協調の在り方

1. 日米構造問題協議と国際経済における日本の役割

(1) 教材として取り上げた理由 今日、国際的な相互依存関係が深まる中で、日本の経済的な地位が向上する一方で、貿易摩擦や国際貢献の在り方などの課題が生じている。日本経済の学習を進めるに当たっては、このことを踏まえ、経済問題を国内を中心とした問題としてのみ位置付けるのではなく、「世界の中の日本経済」としてとらえる必要がある。また、国際社会における日本の地位と役割について、経済の側面から生徒に主体的に考えさせることも重要であると考え、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時までに国際経済体制・国際機関の役割・国際経済の変容について取り扱う。特に金融面での国際化の進展や国際的分業が進んでいる現状を扱い、例えばバブル経済は国際経済の影響が背景にあったことなど、人々の生活は国際経済の影響を強く受けていることを理解させる。本時は5時間構成の第5時限に当たり、前時までの学習内容を発展させ、「世界の中の日本経済」の一つの事例として日米構造問題協議を取り上げる。この協議では日本の政策・制度・慣行など歴史的・文化的な背景をもった事柄が、目に見えない貿易障壁になっていると指摘された。そこで、日本の歴史的・文化的領域までもが国際経済の課題になることを把握させ、この単元のまとめとして国際経済における日本の役割を理解させる。新学習指導要領では、「政治・経済」の「(3) 現代の経済と国民生活」の「エ 国民経済と国際経済」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・国際経済の 中の日本	○最近の経済の動きを理解する。 ①レーガノミクスと双子の赤字 ②プラザ合意などにみられる国際協調 ③日本経済の動きとその国際的な背景	○工業生産・ 財政・為替相 場などの資料 は前時に配付

展 開	・日米構造問題協議とその争点	(1)日米双方の立場に立つグループに分かれ、日米構造問題協議で提起された問題点を確認する。 (2)それぞれの立場に立って、下記のことについて考え作業プリントにまとめる。 ①貿易上の課題は何か。 ②自国の問題点や改善すべき点は何か。 (3)グループの代表が、それぞれの立場に立って考えを発表する。	○資料「日米構造問題協議最終報告」
	・文化的な背景 ・日米構造問題協議の今後の課題	(4)それぞれの問題は、政策・制度・慣行などの文化的な背景を伴っていることに気付く。 (5)両国における日米構造問題協議後の改善点について考察する。	○資料「日米構造問題協議第二次事後点検」
ま と め	・日本の役割	○相手国の立場に立った資料も考察し、国際経済におけるこれからの日本の役割などについて作業プリントにまとめる。	○相手国の立場に立った資料を配付

(4) 評価の観点 ①資料を活用し、自らの置かれた立場に立って考察し、意見が述べられたか。②最近の経済の動きを理解し、日本の役割について考察し、意見が述べられたか。

(5) 指導上の留意点 ①「世界の中の日本経済」としての考え方を重視する。②長期的な展望に立った企業経営・雇用関係など、日本的な文化を背景にした方法が海外でも取り入れられていることにも配慮し、日本の文化を大切にしようとする態度を養うことにも留意する。

2. 国境に生きる民族 - 「クルド民族」を例として -

(1) 教材として取り上げた理由 近年の変動する世界における諸課題の中には、民族問題と深くかかわっている課題がある。第一次世界大戦後、民族自決の理念により、民族問題は終結に向ったかに見えたが、現在も多くの民族問題が生じている。旧ソ連の崩壊によって東西冷戦構造は消滅したと言われるが、このことが程度の差こそあれ、各地の民族紛争の原因とかわっている。世界の諸民族の存在を確認し、それぞれが抱える課題を把握することは、変動す

る国際社会を理解する上で重要な課題の一つと考え、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 様々な国家間の利害関係から、複数の国家に分断されている民族の抱える課題を、民族主義・民族自決と民族の共存という二つの観点から考えさせる。本時では、湾岸戦争によって注目されるようになった、「国家を持たない民族」としては世界最大の人口を持つと言われる「クルド民族」を取り上げる。新学習指導要領では、「地理B」の「(2) 人間と環境」の「ア 人種・民族と国家」のうち、「幾つかの国家にわたって住んでいる民族」として扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・クルド民族の生活	○クルド民族の生活や分布などを把握する。 ○部族主義をとっていたため、部族間のまとまりが希薄であったことを知る。	○白地図配付 ○VTR
展 開	・クルド民族の独立運動の様子 ・クルド民族の現況	(1)「民族自決」の考え方を理解する。 ①トルコの反発や石油資源をめぐる列強の利害などによって、独立がかなえられなかったことを知る。 ②トルコ、イラク、イランなどに分断されたことを知る。 (2)各国のクルド民族の様子を、政府の政策・反体制組織の活動などを通して知る。 ①湾岸戦争後の中東の様子を知る。 ②イラク国内に、「クルド保護区」が設置されたことを知る。 (3)クルド民族内の対立点を考える。	○白地図の活用 ○資料配付 (新聞記事)
ま と め	・今後の課題	○クルド民族の独立の可能性を考え、自分の考えを箇条書きにまとめる。 ○まとめたものをもとに、原稿用紙に書いて次時に提出する。	○原稿用紙配付

(4) 評価の観点 ①クルド民族のおかれている立場を理解できたか。②クルド民族の独立の可能性について、民族主義・民族自決と民族の共存という二つの観点から、自分の意見を述べることができたか。

(5) 指導上の留意点 ①各国の内情に深入りしすぎることなく、クルド民族のおかれている立場を理解させるよう留意する。②可能なかぎり新しい資料を提供するよう配慮する。

(6) 参考文献 S.C.ペレティエ著 前田耕一訳『クルド民族』亜紀書房

3. 統一ドイツと外国人問題

(1) 教材として取り上げた理由 国際的な相互依存関係が深まる中で、日本においても近年、外国人労働者の数が急増し、現在その受け入れの在り方が一つの課題となっている。そこで、早くから外国人労働者受け入れに努めてきたドイツの、東西統一後の現状、問題点、共存への試みについて考察させ、国際社会の中で、相手の立場を理解し尊重することの大切さについて主体的に考える力を育てることをねらいとして、この教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい ドイツ現代史を概観した後に、統一ドイツの国内外の諸課題を理解させ、その諸課題と極右勢力躍進・外国人排斥との関連について考察させる。さらに、外国人排斥に反対する運動があることを確認させ、外国人排斥反対運動の背景には、過去への反省に根ざしたドイツ人の歴史意識・倫理観があることに気付かせる。これらのことを通して、国際化と倫理的課題について主体的に考察する力や態度を育てることをねらいとする。本時は、2時間続きの主題学習で、新学習指導要領では、「倫理」の「(2) 現代社会と倫理」の「ア 現代社会の特質と人間」の「国際化」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・ドイツ現代史の概観	○現代ドイツの歩みを概観し、日本と比較しながら、その特色を理解する。	○VTR ○資料
	・統一ドイツの国内外の諸課題	(1)資料「東西ドイツの格差」より、以下を考察する。 ①統一による国内の混乱・社会不安の様子 ②統一後の国内の課題	○資料「東西ドイツの格差」

<p>展</p> <p>開</p>	<p>・極右勢力躍進・外国人排斥と諸課題との関連</p> <p>・外国人排斥反対運動とドイツ人の歴史意識</p>	<p>(2)資料「旧ソ連・東欧とドイツ」より、以下を考察する。</p> <p>①社会主義体制崩壊と移民者急増との関連</p> <p>②旧ソ連・東欧圏への積極的支援の理由</p> <p>③統一ドイツの東欧圏での国際的役割と課題</p> <p>(3)資料「EC統合・拡大化」より、以下を理解する。</p> <p>①ドイツがECで果たすべき役割と課題</p> <p>(4)VTR・新聞より、以下を考察する。</p> <p>①極右勢力の躍進と外国人排斥の動き</p> <p>②国内外の諸課題と外国人排斥との関連 (外国人流入・失業者増大・財政負担増大などによる国民の不安・不満などと外国人排斥の動き)</p> <p>(5)資料より、外国人排斥に反対する運動を確認する。</p> <p>(6)資料より、外国人排斥反対運動の背景を以下の観点から考察する。</p> <p>①ナチス犯罪への追及と償い</p> <p>②被迫害者の庇護などの社会制度上の工夫</p> <p>③ドイツ人の歴史意識・倫理観</p>	<p>○資料「旧ソ連・東欧とドイツ」</p> <p>○資料「EC統合・拡大化」</p> <p>○VTR「台頭する極右勢力」</p> <p>○「ドイツ国家新聞」</p> <p>○資料「外国人排斥反対運動とその背景」</p>
<p>まとめ</p>	<p>・国際化と倫理的課題</p>	<p>○外国人が急増する日本において、今後どのような〈心の国際化〉を図るべきか、ドイツの現況を例として、自分の考えをノートにまとめる。</p>	

(4) 評価の観点 ①統一ドイツの諸課題と極右勢力躍進・外国人排斥との関連を理解できたか。②外国人排斥反対運動とドイツ人の歴史意識・倫理観との関連を理解できたか。③自己の生き方と関連付けて、主体的に考察する態度がみられたか。

(5) 指導上の留意点 ①資料の活用にあたっては、問題の所在が明確になるように留意する。②複雑に関連しあった現実的諸条件の中から、人間尊重の精神に基づき、人間としての在り方生き方について主体的に考察できるように留意する。

4. 先哲に学ぶ人間としての在り方生き方

－国際社会における日本人としての在り方生き方－

(1) 教材として取り上げた理由 倫理の最も重要な課題のひとつに「他者とのかかわりの問題」(自分とは異質な存在にいかにかかわっていくのか)がある。世界の経済的・人的交流などがますます緊密化し、国際化が急速に進む日本において、「他者とのかかわりの問題」は、国際社会に生きる日本人としての在り方生き方を考察する上でも大きな課題である。最近、日本における外国人労働者が増加するなど、生徒もこれまで以上に外国人と接する機会が多くなった。このことも踏まえ、生徒の内にある外国人に対する意識を明らかにし、相手の立場を尊重し、他者をどのように受け入れ、共存していくかを考えさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 前時までに、「身近にいる外国人」、「日本人の外国人観」、「日本における外国人労働者」を学習する。本時は5時間構成の第4時限に当たり、前時までの学習を踏まえ、先哲の生き方や考え方を手掛かりとして、他者とのかかわり方を考察させ、国際社会における日本人としての在り方生き方について理解と思索を深めさせる。第5時限は、「国際社会における日本人としての在り方生き方」について討論を行う。新学習指導要領では、「倫理」の「(2) 現代社会と倫理」の「ア 現代社会の特質と人間」で扱う。また、「(3) 国際化と日本人としての自覚」の「ウ 世界の中の日本人」でも扱うことができる。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・前時までの 学習内容の復 習	○課題プリントにより学習内容の復習をする。 ①日本人の外国人に対する意識 ②外国人労働者に関する法的・経済的・文化的課題 ③日本人の外国人労働者に対する意識	○課題プリン ト
展	・パスカルの 人間観 ・親鸞の人間 観	(1)「パンセ」より人間の根源的な在り方を考察する。 ・「人間は本質的には利己的で自己中心的な存在である」の内容について (2)「歎異抄」より人間の根源的な在り方を考察する。 ・「罪深い人間の本性」の内容について	○資料「パン セ」断片295・ 455 ○資料「歎異 抄」

開	<ul style="list-style-type: none"> イエスの隣人愛 	<p>(3)「聖書」より、イエスの隣人愛について理解する。</p> <p>①「イエスの説く愛」の内容について</p> <p>②「自分自身が他者の隣人となる」の内容について</p>	<ul style="list-style-type: none"> 資料「聖書」ルカによる福音書10章
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 国際社会における日本人としての在り方生き方 	<ul style="list-style-type: none"> 他者とのかかわり方について、自分の考えをまとめる。 次時の「国際社会における日本人としての在り方生き方」の討議用プリントの整理をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 討議用プリント配付

(4) 評価の観点 ①パンセの「人間は本質的には利己的で自己中心的な存在である」の内容が理解できたか。②「罪深い人間の本性」の内容が理解できたか。③「イエスの説く愛」「自分自身が他者の隣人となる」の内容が理解できたか。④先哲の考えを踏まえ、「他者とのかかわり方」について、理解と思索を深め、自分なりの考えをもつことができたか。⑤「国際社会における日本人としての在り方生き方」について討議を行うための、討議用プリントの整理ができたか。

(5) 指導上の留意点 ①ここで取り上げる先哲の考え方を指導する際には、具体的な事例を示しながら理解させるようにする。②先哲の生き方や考え方を生徒の抱える課題や問題と結び付け、これを手掛かりとして、生徒が現代を生きる人間として大切なものの考え方、態度を身に付けることができるように指導する。③政治や宗教に関する事項の取り扱いについては、教育基本法第8条と第9条の規定に基づき適切に取り扱う。